

2023（令和5）年度 第2回 知床世界自然遺産地域

適正利用・エコツーリズム検討会議

議事録

日時：2024（令和6）年2月7日（水）13:30～16:30

場所：標津町生涯学習センター「あすばる」多目的ホール

<議 事>

1. 知床エコツーリズム戦略に基づく提案の進捗状況
2. 個別部会等からの報告
 - (1) 厳冬期の知床五湖エコツアー事業に係る事業報告
 - (2) 知床五湖地区における運用状況と今後の取組
 - (3) カムイワッカ地区における取組みの進捗状況
 - (4) ウトロ海域における取組み
3. 関係機関の取組み
 - (1) ホロベツ園地再整備事業の進捗と今後の予定
 - (2) 北海道東トレイルの概要と進捗状況
4. 世界遺産管理計画とエコツーリズム戦略の見直しについて
 - (1) 遺産管理計画の見直し（案）の確認と今後の予定について
（特に自然の適正な利用に関する項目に関しての確認）
 - (2) 遺産管理計画の見直しを受けたエコツーリズム戦略の反映内容について
 - (3) 地域の意見に基づいたエコツーリズム戦略の見直し方針の確認
5. その他
 - (1) 知床国立公園60周年・世界遺産20周年事業の概要
 - (2) 長期モニタリング計画に基づく調査結果の報告について

<出席者>

適正利用・エコツアーリズム 委員

北海道大学大学院 農学研究院 教授	愛甲 哲也	web
弘前大学 名誉教授	石川 幸男	web
北陸先端科学技術大学院大学 先端科学技術研究科 教授 (座長)	敷田 麻実	
北海道大学大学院 農学研究院 教授	庄子 康	欠席
富山大学 教育学部 教授	高橋 満彦	欠席
公益財団法人 知床自然大学院大学設立財団 業務執行理事	中川 元	
北海道立総合研究機構 エネルギー・環境・地質研究所 専門研究員	間野 勉	

以上、五十音順

地域関係団体

ウトロ地域協議会 会長	米澤 達三	
ウトロ地域協議会 事務局	桜井 あけみ	web
特定非営利活動法人 知床斜里町観光協会 事務局長	新村 武志	
(一社)知床羅臼町観光協会 会長	大野 貴史	
知床ガイド協議会 会長	岡崎 義昭	
公益財団法人知床財団 理事長	村田 良介	
同 事業部 参事	福田 一輝	
同 事業部 参事	秋葉 圭太	
知床自然保護協会 会長	綾野 雄次	web
斜里山岳会 副会長	山中 正実	
羅臼遊漁釣り部会 事務局	天野 美樹	web
知床小型観光船協議会 会長	神尾 昇勝	web
知床羅臼観光船協議会 会長	長谷川 正人	
一般財団法人自然公園財団 知床支部 主任	向山 純平	
知床ウトロ海域環境保全協議会 事務局長	福田 佳弘	

以上、設置要綱記載順

関係行政機関

斜里町 産業部 商工観光課 課長	河井 謙	
同 産業部 商工観光課 観光係長	岩渕 聖也	
同 総務部 環境課 課長	結城 みどり	
同 総務部 環境課 自然環境係 係長	吉田 貴裕	
羅臼町 産業創生課 まちづくり担当課長	湊 慶介	web
同 産業創生課	田澤 道広	web

事務局

林野庁 北海道森林管理局 計画保全部 計画課 課長	寺村 智	web
同 北海道森林管理局 計画保全部 自然遺産保全調整官	工藤 直樹	web
同 北海道森林管理局 知床森林生態系保全センター 所長	川崎 文圭	
同 北海道森林管理局 知床森林生態系保全センター-生態系管理指導官	岩本 眞和	
同 北海道森林管理局 知床森林生態系保全センター 専門官	寺田 崇晃	
同 北海道森林管理局 網走南部森林管理署 署長	早川 博則	
同 北海道森林管理局 網走南部森林管理署 森林技術指導官	清水 亜広	
同 北海道森林管理局 根釧東部森林管理署 署長	目黒 剛志	
同 北海道森林管理局 根釧東部森林管理署 森林技術指導官	杉原 優人	
北海道 環境生活部 自然環境局 自然環境課 課長補佐	高田 一貴	
同 環境生活部 自然環境局 自然環境課 主査	真野 英世	
同 オホーツク総合振興局 保健環境部 環境生活課 知床分室主幹	椿原 匠	
同 オホーツク総合振興局 保健環境部 環境生活課 自然環境係長	亀崎 学	web
同 オホーツク総合振興局 保健環境部 環境生活課 自然環境係 主事	綾部 武洋	web
同 根室振興局 保健環境部 環境生活課 自然環境係長	河崎 淳	web
同 根室振興局 保健環境部 環境生活課 自然環境係 主事	小林 洸也	web
環境省 釧路自然環境事務所 所長	岡野 隆弘	
同 釧路自然環境事務所 国立公園課 課長	柳川 智巳	
同 釧路自然環境事務所 国立公園課 課長補佐	伊藤 敦基	
同 釧路自然環境事務所 国立公園課 係員	白井 義人	
同 釧路自然環境事務所 ウトリ自然保護官事務所 首席国立公園保護管理企画官	家入 勝次	
同 釧路自然環境事務所 ウトリ自然保護官事務所 国立公園利用企画官	井村 大輔	
同 釧路自然環境事務所 ウトリ自然保護官事務所 自然保護官	加倉井 理佐	
同 釧路自然環境事務所 羅臼自然保護官事務所 自然保護官	西村 健汰	
国土交通省 北海道運輸局 北見運輸支局 首席運輸企画専門官	山本 裕幸	web
国土交通省 北海道運輸局 釧路運輸支局 首席運輸企画専門官	新堂 聡志	web

運営事務局

公益財団法人 知床財団 事業部 公園事業係 係長	坂部 皆子	
同 事業部 公園事業係	谷 洸哉	
同 事業部 公園事業係	吉田 久美子	
同 事業部 公園事業係	宮腰 みずき	

※1 議事録の記述において、発言者の敬称・肩書などは省略しての記載とした。行政関係者の所属については、一部略称を使用した。

※2 文中、検討会議は適正利用・エコツーリズム検討会議の、WG はワーキンググループの、AP は河川工作物アドバイザー会議の、ML はメーリングリストの、それぞれ略称として使用した。

<議事概要>

井村：これより令和5年度第2回適正利用・エコツーリズム検討会議（以下、エコツーリズム検討会議とする。）を開催する。開会に先立ち、環境省釧路自然環境事務所長の岡野から挨拶申し上げます。

岡野：本日はご多忙の中、委員並びに関係機関各位に参加いただき感謝申し上げます。本日の議題は多岐にわたるが、個別部会の取組み、関係機関による取組みについてまず報告いただく。また、知床は来年に世界遺産登録20周年を迎えるが、これまでの取組みを整理し、今後のあり方を示すために遺産管理計画の見直しを行っている。遺産管理計画では、知床の価値、世界遺産の価値、それ以外の価値も含め来訪者に伝えていくための適正な利用についても記載している。本日は遺産管理計画の見直しについて説明すると共に、それを踏まえた今後のエコツーリズム戦略の見直しについても提案をさせていただく。その際に地域の皆さまからいただいている意見も紹介したい。今後のエコツーリズム検討会議あるいはエコツーリズム戦略のあり方についても意見を賜りたい。またその他の項目としては、来年が世界遺産登録20周年であるが、本年は知床国立公園60周年である。この2年を周年期間として関係機関で記念事業に取り組む予定だ。現在斜里町、羅臼町、北海道、林野庁、環境省と調整をしているところであるが、ぜひ関係団体の皆さまにも積極的に参画いただき、知床の価値を広く、将来に伝えていくような取組みを進めていきたい。よろしく願い申し上げます。本日は3時間という長時間ではあるが、皆さまの忌憚のない意見をお願いします。

井村：続いて、委員の出席について報告する。本日は敷田座長、中川委員、間野委員は現地で参加している。愛甲委員はWEB参加である。石川委員は1時間遅れで参加予定である。庄子委員、高橋委員は欠席である。地域関係団体の櫻井氏と天野氏は現場からWEBに変更して参加予定だ。配付資料に不足があれば運営事務局に申し付けてほしい。なお、本会議の資料及び議事録は後日、知床データセンターHPに公開される予定である。では以降の進行を敷田座長にお願いする。

敷田：2023年度第2回適正利用・エコツーリズム検討会議を開始する。年2回のエコツーリズム検討会議は、関係者が一堂に会する非常に重要な場である。時間を有効に使い、実り多い議論にしたい。一方で、多様な考え、立場の違う関係者が集まっている。この場は多様な意見を出していただく場だが、他者を批判したり、貶めたりする場ではない。ぜひ建設的な意見を頂戴したい。建設的な発言とは、自分のみが主張するのではなく、立場や視点の違う意見を聞く側になることでもある。言いっぱ

なしの発言は避けていただき、他者の意見にも耳を傾けていただくことで実り多い会議となる。なお、この場での発言で発言者本人の責任を問われることはない。ぜひ創造的な意見を出していただきたい。この場で出た意見が全て実現するわけではないが、視点の違う多様な意見が出ることは、解決策を豊かにする。それだけ選択肢が増えることだと考えていただきたい。些細な発言の間違いは批判せず、相互に尊重して発言をいただきたい。それぞれ考え方が違う人が同席をしているということを理解いただきたい。

1. 知床エコツーリズム戦略に基づく提案の進捗状況

・資料1 知床エコツーリズム戦略に基づく提案の進捗状況 …北海道・椿原が説明

敷田：説明感謝する。提案として認めた報告や進捗についての説明であったが、これに関して意見や確認があれば願います。

井村：今年度第1回検討会議で質問をいただいた、2017年から2019年の2カ年にわたって開催された知床国立公園利用のあり方に関する懇談会の結果と記録は、知床データセンターの行政機関事業報告書（H29, H30）に議事録と資料が格納済みであり、確認いただける。また、その懇談会の中で地域の意見としてまとまったゾーニングとイメージ案の取り扱いについて、本日の議事4で議論していきたい。

敷田：前回の会議で質問があった内容だ。質問者の斜里山岳会は今の回答でよろしいか。

山中：私は前回欠席であったが、承知した。

敷田：議事録があるため、確認いただきたい。議事録の中で、発言とそれに対する答弁があるため、山中氏から意見があれば発言願う。

2. 個別部会からの報告

（1）厳冬期の知床五湖エコツアー事業に関わる事業報告

・資料2-1 2023年度 厳冬期の知床五湖エコツアー事業報告

・資料2-1別紙 厳冬期の知床五湖エコツアー ルートマップ …知床斜里町観光協会・新村が説明

敷田：説明感謝する。これに関して質問や意見があれば願います。意見がなければ、私

から発言する。前回のエコツアーリズム検討会議で、散策コース変更の決定権を現場の知床ガイド協議会と知床斜里町観光協会に移譲した。その後、具体的に相談や決定が行われたのか知床ガイド協議会から説明願う。

岡崎：ルートはなるべく今まで通りのルートを中心としたが、非常に雪が少ない時期に設定したため、数か所危険な部分も見られた。危険箇所は各ガイドに各々慎重に判断してほしい旨を通達している。現在は積雪量も多くなったため、設定した通りのコースを歩いていると思われる。ルート設定時に3湖上のルートに危険箇所が見られたため、万が一に備えて2湖にかかるエスケープルートを設定した。3月中旬を過ぎると氷が緩む。その場合はもう一度我々でルートを見直し、決定させていただきたい。

敷田：ガイド協議会の説明通り、今年は具体的な変更は行っていないが、今後変更を行うことが予想されるため、前回の取り決め、つまりルート決定の裁量権を現場に下ろし、執行させていただきたいということである。それでは、具体的に変更があった場合に、また報告をお願いするがよろしいか。

岡崎：承知した。

敷田：大幅に変更する場合は、管理者に相談をお願いしたい。相談相手は環境省ウトロ自然保護官事務所でよろしいか。

井村：その通りである。

敷田：細かい点は現場で判断できると昨年合意ができていたので、そこまで相談をする必要はない。迷った場合に相談をしていただきたい。

(2) 知床五湖地区における運用状況と今後の取り組み

・資料2-2 知床五湖地区における取組の進捗状況について… 環境省・加倉井が説明

敷田：説明感謝する。大きく分けて通常の報告部分と前回、前々回も話題となったスイレン除去についてである。これについて意見や確認、質問があれば願う。

間野：スイレンが現在の状態になるまでに何年かかっているか。最初に1湖でスイレンが確認されてから現在に至るまでに要した年数が分かれば、どの程度のスピードで増加したかが分かる。例えば区画1のスイレンを今年中に除去したとして、残りの作

業は本当にこの提案の期間中にできるのか。おそらく除去したところを放置すると、再度侵入してくると思われる。除去が終わった後はその地区への侵入を防ぎつつ、別の区画の作業を進めなければ、イタチごっこになってしまう。過去の増加スピードと現状に至るまでの経緯から、今後どうなるかの見込みについて、知見はあるか。

敷田：最初の説明時に過去の写真とともに説明いただいたと思うが、重要な話であるため再度説明いただきたい。

加倉井：意見感謝する。はじめに、スイレンが知床五湖の1湖に移入し、定着した時期は、詳細が不明だ。過去数度にわたって移入された可能性があると言われている。そのため、この現状に至るまでにかかった正確な時間は算出できていないが、直近の3年から5年ほどで急激に増加したことが分かっている。現在1湖の湖面の9割程度がスイレンで覆われている。また、1度除去した区画も、繰り返し除去が必要になるという指摘についてはその通りである。来年度予定している区画1が終了し別の区画に移った後も、露出するスイレンの葉はその都度除去し、作業を進めていく計画を立てている。

敷田：説明感謝する。間野委員いかがか。

間野：説明感謝する。今後の中長期的な展望を考えた時に、何年でできるのかが重要である。過去3年ほどで繁茂が非常に顕著になったということは、恐らく指数的に増加したと考えられる。除去後のエリアも防衛しつつ、次の場所に拡大していくやり方が重要と考える。ある意味で前例のない取組みであるため、どういう経緯でどうなったかという記録を残しておくことが今後の保全の上で非常に重要な意味を持つと思う。

敷田：意見感謝する。知床地域にとっても非常に重要であるし、この外来植物の除去は非常に大きな事業であるため、初期からの記録もまとめて残してほしいということである。現在まで作っていただいた資料を一括して残していただきたい。

加倉井：承知した。

敷田：関連して何か意見はあるか。

桜井：報告いただいたスイレンの件だが、スイレンは現在2湖にも繁殖しているか。

加倉井：知床五湖の5つの湖のうち1湖と2湖と3湖にスイレンが繁殖している状況だ。

1湖を最初に取り組む対象としたのは、知床五湖フィールドハウスに最も近く作業効率に優れ、高架木道のみ利用者も含め、最も多くの人目に触れる湖でもあるからだ。その後、除去のノウハウが確立したら2湖、3湖に展開していきたい。

敷田：知床五湖のうち、1湖から3湖までで繁殖が確認されている。観光客が多く訪れて目立つ場所のため1湖に最初に着手したという回答だ。そこでのノウハウで2湖、3湖にも除去作業を拡大するという計画だがいかがか。

桜井：以前開催されたスイレン除去に関する地域説明会には関心のある地域住民が多く集まり、その中で以下のような意見があった。1湖のスイレンが90%程湖面を埋めている状況を踏まえると、1湖のスイレン除去も勿論重要だが、今後2湖、3湖の繁茂がさらに拡大することも危惧している。現状として、2湖、3湖の繁殖規模が小さいのであれば、まだ被害の少ない方を一度しっかりと除去し、知床五湖全体に広がるのを抑制することも必要ではないか。そのあたりはどう考えているか。

敷田：質問感謝する。質問は1湖も重要だと思うが、まだ繁殖が少ない2湖、3湖で根絶した方が戦略的に有利ではないかという事である。中川委員何か意見はあるか。

中川：私自身も2湖での繁茂を確認している。1湖はこの5、6年で大幅に増加したように思う。やはり小さいうちに除去するのは有効であるため、並行して作業するのがよいと考える。

敷田：意見感謝する。2湖が大幅に繁茂する前に除去する選択肢もあるのではないかと提案だがいかがか。余力も限られている中、大変な作業だと伺っている。

柳川：現在1湖は基本的にボランティア主体で一部環境省の資金を投入して除去を計画しているが、やはり1湖は利用者が多く視点場の下にあるため、最優先にやるべきだと考えている。2湖は利用者はいてもそれほど多くない。外来種については繁茂する前の段階で除去した方が効果的だという事は理解しているが、当該事業にかける予算には限度がある。例えば、ボランティアベースで地域の方々もしくは地域外の方々が除去作業に参加できるのであれば、2湖も着手できる可能性がある。そこはぜひ関係団体の方々の協力をいただいた上で考えたい。

敷田：予算も限られており、来年度は多くの観光客が目にする1湖のスイレン除去作業を実施する。2湖、3湖については余力があればという説明だ。来年度は基本ボラン

ティアベースになるが、協力いただく余地はあるか。

桜井：大勢の参加は難しいかもしれないが、知床五湖のスイレンの課題はもう 20 年ほど前から地域で取り上げられ、対応についても何度か検討されてきた経緯があるため、関心のある方は参加すると思う。スイレンの特徴として、一定の期間を過ぎると爆発的に増えてくるという話を説明会の講師からも伺ったため、できれば早いうちに駆除した方がよいのではと考え、質問した。平行して検討されるということなので、よろしく願います。

敷田：意見感謝する。ウトロ地域協議会には、ボランティアを集めていただきたいというのが、私からのリクエストである。その際は桜井氏がボランティアを集めていただけるとのことだが、加倉井氏は相談に乗れるか。1 湖は環境省主体で 2 カ年は担当される。2 湖、3 湖はボランティア主体で初期のうちの除去をお願いしたい。頑張っただけであれば、爆発的繁茂を未然に防げると思う。

桜井：ウトロに住んでいる人口の 1%ほどを集めることを目指してみたいと思う。

敷田：感謝する。では 2 湖、3 湖はボランティア主体で、1 湖は環境省が主に担当していただくということにしたい。他に意見がなければ私からだが、知床五湖利用調整地区の認定者数の推移データがあるが、これは斜里町全体の観光客数の傾向と一致しているか。昨年度は 46,300 人で、今年度は 56,000 人に増えている。

河井：斜里町全体の観光客数は昨年度から今年度にかけて約 10%上昇している。そういう意味ではおおむね比例関係にあると思う。

敷田：感謝する。あともう一点だが、登録引率者の試験についてだが、既存の登録者が 33 名で今年度は新規養成者の登録がないようだ。これまでは毎年新規養成者がいたのではなかったか。昨年は 4～5 人いたように記憶しているが、この理由を教えてください。

加倉井：今年度も例年通り新規養成者を募集し、研修も実施したが、最終的に養成カリキュラムを全てクリアし、登録試験までたどり着いた方がいなかったため、今年度は既存の方だけという結果となった。

敷田：感謝する。この登録引率者の認定について、現状で抱えている課題はあるか。すべての関係者が現状のまま進めて良いということで一致をしているか。

井村：今年度は2名が新規登録を希望していたが、他の業務が忙しいなどの理由で課題をクリアできず、途中辞退という形になった。また審査をする事務局も新規養成者が10名になると受入れ能力に無理が生じるため、募集人数は最大5名程度とする方針としている。新規養成者が0名の年は過去にないため、このように順応的に対応できたらと考える。現場で事務を担当されている知床財団から何かあれば意見をいただきたい。

秋葉：知床五湖の登録引率者の養成とは、地域のガイドをどう育てていくかという課題とほぼ同義である。ヒグマの出没目撃が非常に多くなっていく中で、ガイドの役割や期待は大きくなっており、多くのニーズが特定の時期に発生すると、現状の人数では受けきれないという課題が想定される。制度自体の見直し議論も進めているが、その時にガイドの人数やサービスの供給量がボトルネックになり得る可能性はある。しかし、特定の時期や場所だけでガイド付きの制度を推進しようとしてもガイドサービス全体の需要がトータルで増えるわけではないため、無理がある。五湖の制度の枠組みではなく、地域全体でガイド付きの商品をどうプロモーションし、流通させるか、といったもう少し大きな枠組みで検討する必要があるのではないか。もうひとつは、ヒグマの行動や遭遇率が制度設計当初から変わってきた実態に対し、現在の養成研修の要件やカリキュラムが追いついているのか、という質の面の課題もある。長く続けているガイドは経験が蓄積されるが、新規のガイドに対してどう対応してゆくの、質の部分はどう底上げしていくかが今後の課題になると考えている。

敷田：知床五湖の問題だけではなく、知床のガイド全体の問題とほぼイコールな重要な問題であるということと、現在の養成カリキュラムの教育内容が現状と一致しているかという課題の指摘だ。ガイド協議会から何か今の発言に関して意見はあるか。

岡崎：現在、ガイドの総数は頭打ちの現状だ。大きなガイド事業者であれば新しい人を雇い、研修して育てることも可能だと思うが、外から来た人がこの資格を取って食べていけるかという問題もついてくる。知床はヒグマの性格も他地域とは違う上、年々ヒグマの性格が変わり続けているようにも感じる。以上を踏まえて、これからのように人を育てていくか。座学的なものよりも体で覚えてもらう方が多くなってきている。また教える方もそれだけの知識を持っている人でなければならないと考える。失礼だが、私としては試験を担当している知床財団もどれだけの知識を持っているのか不安に思う時もある。その辺の改良をどのように行っていくかはこれからの問題だと考える。ベテランガイドは高齢になりつつあり、将来的にガイドは

足りなくなる可能性が高い。これからどうやって若い人を入れて育てていくかというのが一番大きな問題であると私自身は考えている。

敷田：意見感謝する。雇用の問題とリンクしているので、なかなか難しいという話だが、現状について関係者全体で具体的に何かできることはあるか。

岡崎：現在、私が原生林などに新人ガイドを連れて研修したりするようにしている。現在は全体をどういう方向にもっていくか模索中である。

敷田：ガイド協議会としての方向性ははっきりしていないということだ。どなたがこの知床のガイド全体のあり方を考えることになるか。

岡崎：ガイド協議会には権限があるわけではない。どちらかという環境省、北海道、知床財団が実務的な立場にあるため、我々がアドバイザーとして参加することもルールを作ることはできない。知床の基本的なルールは、やはり行政でしっかりとしたものを整備していただきたい。

敷田：遺産管理計画やエコツーリズム戦略の中でも、ガイドは位置づけられており、知床の自然を解説するというよりも、価値を提供していく非常に重要な役割を担っている。もう少しガイド養成、ガイドの位置づけを知床の中ではっきりさせてもよいと考えるが、斜里町、羅臼町はガイドの将来について考えをお持ちか。

河井：知床でガイド事業者がビジネスを始めて約30年経った。それぞれが民業として自由に事業を起こして活動されてきた。岡崎氏がおっしゃったように世代交代や新規参入を促す仕組みが必要であることは課題として認識されるようになってきた。現実にはガイドがいることによって、宿泊、飲食をはじめとした知床観光、その他来訪のきっかけになっているのは確かである。現状として、町によるガイド事業者への公的支援はほぼないが、これだけ年月が過ぎ、ようやくその部分を改めて考え直さなければならない時期に来ているという認識である。前回のエコツーリズム検討会議で説明したアクティビティリスク協議会においてもこのようなガイド育成という観点が出はじめているため、具体的なスキームにはまだ至っていないが、何らかの形で支援が必要ではないかという議論になってきている。

敷田：説明感謝する。河井氏からは昨年この場で話していただいたリスクマネジメントの中でも、ガイドの役割というのは非常に重要である。その認識があるため、知床の魅力を生み出していく役割としてガイドの役割をもう一度考えたいということである。

ぜひ前に踏み出していただきたい。継続して知床五湖の登録引率者が増えるよう願う。斜里町からお話をいただいたが、羅臼町からもこの点について発言いただきたい。

湊：羅臼町では活動しているガイドが少ない状況であり、これから少しでもガイドを増やしていきたい思いはあるが、現在支援も含めて方向性がまだ決まっていない状況だ。

敷田：報告感謝する。この場で何か決められるわけではないが、先ほど申し上げたようにガイドは知床の遺産管理計画やエコツーリズム戦略の中でも位置づけられている。斜里町からあったとおり、リスクマネジメントを支える人材にもなりうるため、知床五湖に限らず、ガイドの養成についてはぜひ何らかのステップを踏み出していきたい。知床五湖の取組み全体として何か意見はあるか。

河井：一点訂正する。冒頭に、観光客の入り込み状況と知床五湖利用調整地区の認定数が比例していると申し上げたが、今年度の斜里町の観光客の入り込み数はコロナ禍前の7割で推移しており、五湖の利用調整地区は9割まで回復している。比例ではなく知床五湖利用調整地区の回復の方が早いと理解できる。全体として団体観光の回復が非常に遅れている現状があり、知床五湖の地上遊歩道に関しては比較的個人型の利用が多いため、このような差が出ていると考えられる。

(3) カムイワッカ地区における取組の進捗状況

・資料2-3 カムイワッカ地区における取組の進捗状況について…斜里町・河井が説明

敷田：説明感謝する。質問や確認があれば発言願う。各事業の実施結果で、前回資料の利用者数はこの期間通算で入っているか。

河井：入っていたはずである。多少省略した部分はあるが、前回には数字が確定していたため、ここを出している6,049人であった。

敷田：その前は何人であったか。

河井：その前は仕組みが違うため比較できないが、自由に利用できる下部区域があったため、それを含めると38,000人から40,000人程であった。

敷田：今後の見通しについてここで共有しておきたいことがあれば願います。

河井：12月19日に開催したカムイワッカ部会の中で、議論になった点を若干補足すると、湯の滝の試行事業の評価は、全般的に良かったという意見が会議参加者の主流だった。一方現場の運用面では、ヒグマの目撃が多発していた状況の中で、現地の管理者3名が必死に対応した結果、このように大きな事故もなく実施することができた。繰り返しになるが、やはりリスクマネジメント的な観点が重要との結論だ。もう一点がマイカー規制とシャトルバスの運行についてだ。利用者からの運賃によりシャトルバスを運行するという考え方のため、来年度は実施期間を利用者の多い10日間に短縮して実施することが決まったが、果たしてそれでよいのかという意見が会議では出されている。しかし、事業を運営する側からは赤字を前提にシャトルバスを長期間運行するという考え方はできないため、マイカー規制期間を短縮したことに理解いただいた。

敷田：説明感謝する。リスクマネジメントの点でまだ検討する余地があるという事と、マイカー規制は10日間で採算性の面で限界であり、赤字になっても期間を延ばすという選択は取りにくいという事である。

(4) ウトロ海域における取組み

・資料2-4 ウトロ海域における保全と利用の取組の進捗状況について…知床ウトロ海域環境保全協議会・福田が説明

敷田：説明感謝する。コメント、質問があればお願いします。10年にわたって地道に活動を広げていただいているが、ここにきて「知床・ウトロ海のハンドブック」の売り上げ減少から、活動が停滞しかねないという悩みを語っていただいた。支援ができる場所があれば、皆さまから申し出いただきたい。資金の問題は別として、知床ウトロ海域環境保全協議会の活動は今後どのように展開するのが理想だとお考えか。

福田：理想はケイマフリを含めたウトロ海域の生態系の魅力を高め、伝えるための活動を続けたい。このような活動の成果はなかなか目に見えるものではないため、同じ活動を長く続けることが一番の目標だ。

敷田：回答感謝する。これに関して他に意見はないようなので、次の議題に参りたい。

3. 関係機関の取組み報告

(1) ホロベツ園地再整備事業の進捗と今後の予定

資料3-1 ホロベツ園地再整備事業について…斜里町・結城が説明

敷田：報告感謝する。前回は具体的な事業内容や進め方も示していただいたが、今回は地域との再調整を図りたいという提案であり、内容が変わっている。これに関して意見やコメントがあれば願います。今回の見直しについては、地域の関係者と調整の場を持ち、この検討会議にも位置づけるという意向と理解したが、これも含めて意見をお願いしたい。

米澤：この件については、計画段階から地元意見の集約が十分にされていなかったということで、昨年末あたりに随分意見が出た。それに伴い再度協議し、現在のフレペの滝の展望台の改修必要だという事になった。ただその工事内容についてはまだ検討の余地があるのではという事で、斜里町は一旦工事をストップしたという状況だ。この期間に話し合い、地域住民の大多数の賛成の元に施工されてほしいと思う。

敷田：追加の説明に感謝する。ウトロ地域協議会でも、地域関係者がもう一度検討の場に立ち会うことについては積極的に賛成するという事なので、ぜひお願いしたい。これについては、エコツーリズム戦略の部会制度を利用させていただきたい。地域の方にとっても重要な場所だということは間違いないが、保全保護の関係も含めて関係者も多く、知床にとって非常にシンボリックな場所である。斜里町も以前から知床自然センターがあるホロベツ園地は非常に重要なポイントとして位置づけてきた。できれば羅臼町も含め関係機関全体として、知床世界遺産の中でのシンボリックな場所についての合意形成ということで、部会制度を利用させていただきたいと思うがいかがか。

結城：斜里町としては今後のスケジュールも含め具体的な方針はまだ定まっていないが、地域を含め何らかの協議をする場は必要と考えている。エコツーリズム検討会議の枠組みを活用しながら進めたいと考えているため、来年度にはまず地域の主要なメンバーに集まっていただき、そこから再スタートしたい。

敷田：説明感謝する。皆さまも恐らく同じ意見だと思うが、エコツーリズム検討会議の検討部会を利用させていただき、協議の場を作っていただいた上で、しばらくは準備作業をしていただくのがよい。恐らく来年度1回目のエコツーリズム検討会議で部会をスタートさせていただき、その後はこの検討会議の場で部会での検討結果を共有しながら進めていただきたい。エコツーリズム検討会議は皆さまが決めたことを承

認する場であるため、検討内容に指示を出すことはない。むしろ皆さまの決めたことをこの場で共有していただくことが基本になると思うが、いかがか。

結城：斜里町としても今後の議論の進捗状況については、逐一報告したいと考えている。皆さまからのご意見もいただけるならば、大変ありがたい。

敷田：そのとおりである。基本的にエコツーリズム戦略の枠組みを活用すれば、関係者は積極的に協力することになるため、当事者以外の方も自分の責任範囲の中で積極的に協力していただくことになるが、それを踏まえての合意でよろしいか。

桜井：ホロベツ園地は地域にとって大切な場所であると共に、恐らく観光という点でも一番身近に感じている場所だと思う。ホロベツ園地がもっとよい形になることは、地域全体が強く望んでいる。ホロベツ園地に関わる管理者が一堂に会するエコツーリズム検討会議は、地域にとってもよい形で多くの方々に知床の良さを知っていただく、あるいは世界自然遺産地域としての価値を知っていただくための議論の場として望ましい。かつてのように、ダメありきで進むのではなく、ある程度の節度を持った遺産地域にあるべき姿を検討する議論が展開されることを強く望んでいる。

敷田：発言感謝する。おっしゃるとおりだ。皆さまの協議の結果、知床の新しい魅力、価値が創出されるのであれば、非常に良い。ぜひ積極的に参画をお願いします。

米澤：ホロベツ園地の整備にあたっては、知床観光で知床五湖に集中する利用者を分散する目的もあると斜里町から聞いている。そうであれば、現状復帰だけでは魅力は出てこない。それに見合った設備を伴わなければ、新たな価値は上がらないと考える。従って、林野庁にも用地の使い方を一緒に考えていただき、融和な政策を検討いただきたい。

敷田：提案の趣旨は理解する。ホロベツ園地が非常に重要な場所であることは皆さま意見が一致していると思われるが、より良くするための余地はある。そのためには関係者が協力をしなければならない。ホロベツ園地の関係者で非常に重要な立場である林野庁から意見をいただきたい。この件に関して積極的に参加していただきたいとの皆さまからの要望である。

早川：札幌に在籍している担当者が本日は欠席のため、私から発言する。林野庁としてのスタンスはこれまでと変わらず、協議に関わるという事で間違いない。これから審議になると思うが、遺産管理計画の中の利用等に関わるゾーニングの問題で、国有

林はどちらかというと保護的な管理を前面に出さざるを得ない。一方で、利用区域の今後を見通した場合の重要性も十分理解しているため、今後もしっかりと関係各所と関わり、さまざまな意見をいただきながら進めたい。

敷田：発言感謝する。積極的にテーブルについていただけるという事だ。できればもう一歩進めていただき、林野庁からも提案や前向きな参加をお願いしたい。法令、制度は遵守することは当然だが、行政上現地の裁量の範囲もあると思われる。それを最大限活用していただきたい。また国有林を守ることを第一に考えていることは理解するが、ここの利用を新たに展開することで、知床全体としての価値が生まれることや、全体の保全保護のレベルが上がるという効果が出れば、別の価値が生まれたことになる。どうか視野を広げて判断していただきたい。

早川：承知した。

敷田：関連した発言はあるか。

山中：これから始まるホロベツ園地の地域での検討がどのようなものになるかにもよるが、林野庁をはじめとする関係行政機関も参集する場になるのであれば、座長が言われたような部会をわざわざ作る必要はないのではないか。同じようなメンバーが再び集まり議論するのは無駄だと考える。地元の会議の内容次第では、膨大な本会議の資料を更に増やす必要はない。他の事業と同様に進捗状況を報告していただき、必要であれば専門家を含めて助言をいただければ充分と考える。

敷田：山中氏がおっしゃったことはまさに検討部会制度の本質であるが、部会にするか否かは関係者が決めることであるため、意見として伺っておく。

山中：部会にしたらどうかという座長の問いかけに誰も発言しなかったのは、誰もやりたくないからではないか。反対意見がなければ合意されたという進め方は前回もあったが、違うと思う。

敷田：それは山中氏の意見であり、別の意見もある。ここは承認をする場であり、詳細な検討はできない。したがって、検討部会を運用していただくのが良いと考える。直前ではカムイワッカが同じ方法を取っており、みなし部会としてではあったが、同じようなやり方が適応されている。カムイワッカの件についても、関与したくない方、関与しない方が、参考意見やアドバイスをするが決定には関わっていないのは事実である。ということで、斜里町で進め方を考え、林野庁にも積極的に参画いた

だけるといふことによろしいか。

結城：現時点では方向性を明確にできないが、内部で検討していきたい。

敷田：検討部会制度を使っただけ趣旨は、個別のベストな解決と全体の合意のズレが生じるのを防ぐためである。エコツーリズム検討会議とは、全体としての調和を取るためにある。決定をするのはあくまでも個別部会であり、全体で何かを左右する場ではないことは皆さまも理解しているとおりである。それでは、ホロボツ園地再整備事業については、斜里町が準備を進め、可能であれば来年度の第1回検討会議で提案し、そのまま具体的な議論に入っていくという流れと理解する。あとは関係者の皆さまと相談して進めていただきたい。

(2) 北海道東トレイルの概要と進捗状況

・資料3-2 北海道東トレイルの概要について…環境省・井村が説明

敷田：説明感謝する。北海道東トレイルについて質問、コメントがあればお願いします。

山中：天に続く道から北側の海岸線の道は国道を歩くのか。また、知床横断道路の部分は、知床横断道路上を歩くのか。

井村：知床峠のあたりは全て国道334号線がルートとなる。知布泊以降も国道334号線を通る。この辺りは道幅が広い箇所と狭い箇所があるが、車に気を付けて歩道を歩いていただきたいと考えている。天に続く道周辺についてはいくつか検討中のルートがあり、来運神社から中斜里を通るのか、越川を通るのか、どちらも実際に歩きつつ現在検討中である。今年度中にはルートが決定する予定である。

山中：その部分の話ではない。峰浜あたりは、車も少なく景色も良いので結構だが、海岸線に出てからウトロまでの道は、国道を歩くのであれば歩道のない場所もある。歩道があったとしても、交通量の多い中排気ガスを吸いながら歩いても、楽しくないと思う。知床横断道路は歩道もなく、かなりのスピードで車が往来している。眺めはいいが、ここに掲げているような意味合いの歩く道にはならないのではないかと。例えばウトロから峰浜間であれば山側の旧道を活用することが考えられる。知床横断道路は難しいが、以前、羅臼湖の駐車問題が課題になった時に、羅臼山岳会からの提案だったと思うが、知床峠の駐車場から羅臼湖に直接通じる歩道を開削してはどうかという案もあった。そのような工夫をしないと、ただ車が多く走る国道の脇を歩いても、この目的に合致するような気持ちの良い道にはならないと考える。

敷田：意見感謝する。このルートは井村氏が一人で決められるものではないと思われるので、山中氏の発言は参考意見として伺っていただきたい。

井村：設定する段階でも国道を歩くのはどうかという意見は多々あった。しかし 350～400 km を繋ぐ上で、今回はスピード感を持って進めることを優先した。山中氏の発言は意見としては受け止めるが、現在は国道を使って歩く予定である。

敷田：ルートは検討中の部分もあるが、現状の計画の報告であった。中川委員からコメントはあるか。

中川：山中氏の発言の通り、危険箇所や旧ルートを再開発して使う道も確かにあるが、国道を全く利用できないというわけではない。知床横断道路も朝 6 時以降は交通量が多いが、夏は朝 4 時から明るく、鳥の声を聴きながら歩ける素晴らしいルートである。時間で住み分けるなどの対策も考えられるのではないか。知床から阿寒、釧路を繋ぐという構想自体は非常に良いアイデアであるため、皆で工夫しつつ進められたら良い。

長谷川：中川氏は朝が良いと言われたが、最近はヒグマが多い。私も早朝に知床横断道路を通ることがあるが、驚くほど多くのヒグマが路上に出てくる。自転車で知床横断道路を越える人たちをヒグマが追いかけてたりして怪我をするのではと心配している。ヒグマの目撃は年々増えている上に観光船事故の後でもあり、知床横断道路を徒歩で歩く人が怪我でもしたら大変だと危惧している。これは実際に発案者が歩いているのか。山中氏のおっしゃる通り、まずは環境省の担当者が実際に全コース 400 km を走破して、良いものであると判断した場合、再びこの場で実施報告をした方がよい。

敷田：意見感謝する。ヒグマの問題もあり、なかなか大変だという意見である。井村氏にはご苦勞をおかけするが、いったん動き出した計画であるため、より良くする工夫が必要ではないか。道路を長距離歩くという例では、四国のお遍路が挙げられる。むしろ、歩いている人たちに対して、いかに地域の人が親切にできるかでルートの魅力が変わってくる。それはスペインのカミーノ・デ・サンティアゴ（巡礼路）でも同様である。一般の道路を歩くこともあれば決して安全な道ばかりではない。しかしこれも地元の演出や支援次第である。歩く人には罪がないので、利用者が楽しく歩けるよう、いかに工夫できるかという事だ。また知床にとっては、国立公園や世界自然遺産地域以外の魅力を紹介するきっかけにもなるはずだ。全体として知床

にとってメリットがある事業になればよい、というのが多数の意見だと理解している。

村田：こうした取組みは、公共交通機関とセットで検討することが不可欠だ。200 km や 300 km のコースを一か月かけて連続で歩く利用者はほとんどいない。実際は、区間を分けて一度帰宅し、前回の続きから歩くのが一般的だとすると、そこまでのアクセスもセットで考えなければならない。かつて人気であった東海道や中山道は、公共交通機関を利用することで週末の2日間を歩いて月曜には帰宅して出勤ができる。そういった仕組みが必要である。釧網線への貢献という形も含め、バスなどプラスアルファの交通機関をプランに入れて検討しなければ、現実的にはよほどタフな人でなければ利用できないハードルの高いコースになってしまう。

敷田：意見感謝する。区間で分けた利用形態も想定されたため、それに対する支援など、包括的なアプローチが必要だという意見である。巡礼やお遍路さんもパーツで歩くことがあり、その方々向けのバスツアーやサービスがある。また、地元の皆さまは価値を認識するのが難しいが、違う地域の人がこのルートの価値を見出し、充実させるという可能性もある。前述のカミーノ・デ・サンティアゴは現在韓国人が大変多く歩いている。それは、遠方にいる韓国人がそこに価値を見出したためである。そういったことも起こりうるので、ぜひ可能性に賭けていただきたい。

(休憩)

4. 世界遺産管理計画とエコツーリズム戦略の見直しについて

(1) 遺産管理計画の見直し(案)の確認と今後の予定について

(2) 遺産管理計画の見直しを受けたエコツーリズム戦略への反映内容について

・資料4-1 知床世界自然遺産地域管理計画の見直し検討について

・資料4-2 遺産管理計画の見直しを受けたエコツーリズム戦略への反映…環境省・伊藤が説明

(3) 地域の意見に基づいたエコツーリズム戦略の見直し方針の確認

資料4-3 地域の意見に基づくエコツーリズム戦略の見直しの視点…環境省・井村が説明

敷田：説明感謝する。それでは、資料4-1、4-2、4-3の内容について協議したい。

はじめに資料4-1の遺産管理計画の見直しについては、科学委員会や各WGで検討してきた内容で、ほぼ最終案という所まできている。コメントがあればお願いします。

山中：さまざまな課題はあるが、現時点ではこのような形での整理になっていることは理

解する。私たちは現場も経過も知っているので遺産管理計画読んでも理解することができる。しかし遺産管理計画は英文化も行い、IUCN も含め海外にも説明やアピールのために用いられる。また、国内的にも管理のあり方を説明する資料であると思われるが、現案ではさまざまなことが交錯して記載されており、このままでは理解が難しいと感じる。一番分かりにくいことは、各制度が何をどのように担保しているか不明瞭な点である。資料4-1の51ページに保護制度や関連計画について記載されており、ある程度理解はできるが充分とは言えない。またどこで何が保全されているかは、7ページの「地域区分による自然環境の保全管理」の項目において、遺産登録時に決まったA地区、B地区の2つが記載され、その後段の「基本方針」の項目でさまざまな保護制度が列記されているが、各制度の区域やゾーニングは定かではない。そして「基本方針」の後段には、エゾシカやヒグマ、エコツアーリズムも含め管理計画に付随するさまざまな付属計画について記載されている。本文ではエゾシカやヒグマの関係各々の地区区分について記載されているが、その図面がどこにあるか分からない。51ページの説明をもう少し具体的に説明した上で、ゾーニングや区分などのビジュアル的な付属資料があると理解しやすいと思われる。

敷田：意見感謝する。構造的は変更をする時期は既に過ぎており難しい点もあるが、資料4-1の51ページの図を分かりやすくしてほしいという提案は妥当であると思う。環境省はいかがか。

岡野：全体の構成ではなく、より分かりやすく巻末資料を整理してほしいという提案と受け取った。確かにそれぞれ個別の計画でそれぞれの区域とゾーニングがあり、A地区、B地区以外にもそれぞれの保護地域のゾーンと管理方針が存在する。これらは補足資料という形で地図を付けることにより補うことができるだろう。

敷田：回答感謝する。関連して、科学委員会でも文章が曖昧で行政文書的な表現が混在しているという指摘があったが、大幅に改善されている。

岡野：文章表現については、英文化する際に多少の修正をする可能性もあるが、了承いただきたい。

敷田：遺産管理計画は大枠を示す計画であり、詳細な箇所はまだ言及していれば雑多な内容になるため、基本方針を記載しているのご理解いただきたい。そして基本方針をどのように運用していくかは、それぞれの分野や制度で作成している計画の中で具体化されていくのが通常である。以上でよろしければ、次に遺産管理計画の見直しを受けてエコツアーリズム戦略へどのように反映していくかという視点で資料4-2、

4-3に基づく意見をいただきたい。先ほどのエコツーリズム WG での議論においては、エコツーリズム戦略の改定は来年度中を目途として進めるという説明もあった。当然、地域の皆さまの参加と合意で完成するものであるため、スケジュールありきの作業ではないが、来年度は密な議論が必要なスピード感と考えていただきたい。

山中：資料4-2別紙の見直し（案）の項目に「9. 将来目標（4）利用のゾーニングとイメージ案」が加わっている。これは参考資料3に示す内容をここに盛り込むという理解でよいか。

敷田：どのように位置づけるかは午前のエコツーリズム WG で答えていただいた。同様の内容で回答をお願いします。

岡野：参考資料3のゾーニングとイメージ（案）については、地域の皆さまで議論いただいた結果と理解している。今回の見直しにあたっては、このゾーニングとイメージを将来目指すべき目標としてエコツーリズム戦略に位置づけたらどうかと提案している。これまでにいただいた意見がベースになると思うが、エコツーリズム戦略の見直しにあたっては、来訪者に伝えたいメッセージや望まれる体験について議論と整理をした上で、必要に応じ修正したものを加える段取りを想定している。いずれにせよ、ゾーニングとイメージ（案）については、目指すべき将来目標として位置づけ、これを実現するためにエコツーリズム検討会議の場を使い、関係機関が協力して進める形を考えている。

敷田：説明感謝する。異なる視点からでもよろしいが、他に意見はあるか。

長谷川：資料4-2と4-3は連携しているか。資料4-2に対する見直し案が資料4-3に相当するののか。

敷田：資料4-2と裏面の別紙は連携している。資料4-3は関係団体へヒアリングを行った意見集であり、直接繋がってはいない。

岡野：資料4-3でいただいた意見を踏まえた上で資料4-2に反映させた箇所もある。

長谷川：理解した。先ほど環境省が説明した北海道東トレイルもそうだが、交通面が心配であり、ライドシェアも進んでいない。羅臼やウトロではハイヤーがそれぞれ1台しかなく2次交通がほとんどないため、将来目標としてこのエコツーリズム戦略の中で2次交通のあり方を検討しなければならない。ライドシェアを含め国交省や行

政が動かないと簡単に進まない。現場で働く人たちが困っていることでもあり、法律を緩和するような働きかけもなかったら、今後はさらに厳しくなるため、エコツアーリズム戦略の中で検討いただきたいと思う。

敷田：意見感謝する。環境省から何かあるか。

岡野：指摘いただいた2次交通の問題は以前から各地で議論になっているし、エコツアーリズム推進法の中でも、ガイドに限定されるが送迎の特例を設けるといった対応をしている。将来的に議論すべき項目であると思われ、エコツアーリズム戦略は地域で考えていくものでもあり、実現できるか分からないがエコツアーリズム検討会議の場でも必要であれば取り上げたい。

長谷川：何が何でも行くと会議で明言しなければ、中々進まない差し迫った課題である。事業所や両町含め、全体でまとまって意見をしなければ行政かない。外国人も増えているため、早急にライドシェアに準ずるものを取り入れていただきたい。

敷田：意見感謝する。今の意見は非常に重要で、観光というより両町の生活にも関わる課題であるが、検討会議で意見するより羅臼町議会で話した方が実現が早いと思われる。他の地域でも行っているがライドシェアや相乗りタクシーは、地域単位で行うことが可能である。他にも意見があれば頂戴したい。

河井：資料4-1の遺産管理計画の中の保全管理の目標という項目があるが、利用に関わる目標という項目がない。保全管理という視点のみでなく、利用に関する目標も必要ではないか。遺産管理計画の目標は、自然環境を将来にわたって適正に保全管理し、遺産の価値をより良い形で後世に引き継いでいくと記載してある。要は利用を一定程度認め、促さない限りは継承もできないと個人的に考えている。今回の見直しにあたっては、適正利用に関して具体的な方針を長文で記載していただいていることは承知しているが、それに対応する目標がない。可能であれば利用に関する目標も掲げていただければと思っている。

敷田：意見感謝する。遺産管理計画の中に利用の目標が位置づけられるのだが、恐らく世界遺産の管理体系と矛盾する管理計画になってしまうため、IUCNに確認する必要がある。

岡野：世界遺産の利用が否定されていることはなく、IUCNからも知床においてはエコツアーリズム戦略を策定すべきとの勧告をいただいている。利用の目標を掲げること自体

は IUCN も問題はないかと思われるが、記載内容の検討が難しい。

敷田：保全管理の項目で利用の目標を記載すると矛盾してしまう。

岡野：その通りだ。河井氏もおっしゃったように、利用については大きく記載してあるが、利用の目標として定性的にどのように記載するのがよいか。

敷田：河井氏の意見は、要するに利用を増加させよう趣旨を記述すべきということか。

河井：そうではなく、行政側としても遺産の価値に積極的に触れる機会を作っていかなければならないと考えている。エコツーリズム検討会議で提案して初めて利用が許されるのではなく、行政側が主体的に価値を伝え、触れるための機会を作らなければならないという趣旨だ。もちろんオーバーユースを求めているのではなく、持続可能な範囲でという条件は付ける必要がある。

敷田：今の意見を記載しても矛盾は発生しないと思われるが、環境省はいかがか。

伊藤：資料4-1の26ページの「(7) 自然の適正な利用」の冒頭から以下に全項目を総括した内容を記載している。まさに遺産管理計画として利用の基本方針に相当する部分と理解している。この記述に紐づけてエコツーリズム戦略を位置づけ、エコツーリズム戦略の枠組みにおいて、知床らしい良質な自然体験の提供に取り組むという構成だ。6～7ページの「保全管理の目標」の項目は、遺産としての価値を維持・継承するための保全管理の目標であり、長期モニタリング計画の枠組みと連動している。つまり、継続的にモニタリングをすることで、現状を把握するためのデータが得られ、こうしたデータに基づいて遺産価値の保全状況や変化の兆候を見据えた形で必要な管理を行う枠組みを記載した。利用の目標については、河井氏の意見はその通りであるが、「(7) 自然の適正な利用」の項目が目標であると理解いただいた方が分かりやすいと思われる。

河井：「(7) 自然の適正な利用」は基本方針であり、保全管理と並列する目標としてグレードを上げてほしいという意見である。科学委員会は保全管理の目標があるから、さまざまなモニタリングをしていると理解している。それに相当する利用面の目標がないことが気になっているため、可能な範囲で検討していただければと思う。

敷田：遺産管理計画は観光振興計画ではないため、素直に実現目標を記載できないと思われる。世界遺産の推薦書を基礎として遺産管理計画が作成されているが、推薦書に

は観光振興について記載はなく、直接的な文章にするのは困難と思われるが、内容については会議後に調整していただきたい。

河井：可能な範囲で検討していただきたいというのが発言の趣旨だ。以後はお任せしたい。

敷田：今の意見については事務局で持ち帰り検討いただきたい。遺産管理計画は IUCN も見るため慎重に願います。

岡野：構造的には目標が遺産価値をどのように管理するかという記載になっている。

敷田：手段として利用を高めるという書き方はできるが、利用について独立してしまうと IUCN が承認しない。

岡野：例として、資料 4-1 の 1 ページ目に遺産管理計画見直しに当たっての重点ポイントを 5 つ挙げているが、⑤に「地域主導による遺産価値の保全と利用の好循環」を挙げている。これはエコツーリズム戦略を念頭に記載したもので「付加価値を高めたエコツーリズムの推進により、来訪者の満足度を向上させることによって、地域経済の活性化と遺産価値の保全を促進する好循環を生み出していく」と記載している。こういった記載であれば、どこかに組み込めるのでないかと考える。相談させていただきたい。

敷田：他に意見はあるか。

秋葉：エコツーリズム戦略の見直し案では、資料 4-2 別紙の「8. 良質な自然体験の提供に必要な要素」として、来訪者に伝えたいメッセージや来訪者に望まれる体験が明示され、さらにこれらを知床半島全体で実現するフィールドの計画として「利用のゾーニングとイメージ案」が位置付けられる構成と理解している。こうした内容を盛り込んだ見直し案について、知床財団として賛同したい。一方、理想的な体験や目指すべき将来目標が明示されることは重要だが、これを誰が担い手となり、どのような順番で実現するのか、といった観点もさらに重要だ。利用のゾーニングとイメージ案の内容については、既に着手済みの内容や実現しつつある内容もあるが、まったく未着手の内容も混在している。新たなエコツーリズム戦略は、国立公園満喫プロジェクトにおけるステップアッププログラムにも近い性格を有すると想像する、ステップアッププログラムには、どういった順番で誰が実施するのかがしっかりと書き込まれている。エコツーリズム戦略においては、提案制度で誰かが実行する、という設計とも考えられるが、現行の提案制度だけでは実行の部分に課題が残

る。大きなビジョンと同時に誰がどのように実施するのかという実行計画の取扱いを検討する必要がある、併せて提案制度のメリットを活かすための見直しが今後の議論の重要なポイントである。

敷田：具体的に誰がどのように実現するのか、提案制度の見直しを含めて検討すべきとの意見だ。また、提案制度については、資料4-3の4ページの「提案制度に期待すること」に記載されている課題を参考に見直しをした方がよいという意見でよいか。

秋葉：その通りだ。

敷田：当該資料の「提案制度に期待すること」では「基本的なインフラ整備に関して検討できる場にならないか」という意見が掲載されている。インフラ整備だと規模も大きく具体的なプランを作成する必要があるため、その内容が具体的にエコツーリズム戦略に記載されるとよい。即答はできないと思うが、事務局からコメントはあるか。

岡野：事務局からは案として提案しているが、エコツーリズム戦略は検討会議の場で作成するものであるため、皆さまと一緒に展望を書き込んでいくという形であり、それが一番重要なことだ。ぜひそういった議論をこの見直しに合わせて行いたい。さまざまな意見を頂戴したい。

敷田：関連して、知床全体としての品質保証＝ブランドとしての考え方になるが、こういった観点は今後常に意識する必要がある。個別の問題解決も必要だが、全体のブランドと表現しようとしている価値とが一致しているかは常にチェックが必要だ。そういった面でもエコツーリズム戦略に具体的な確認の仕組みが入っていると良い。個別のパーツが素晴らしいことで全体の価値が向上する、という見方は既に時代遅れであり、全体として一つのメッセージが出せる地域であればと願っている。

山中：提案制度についてだが、資料4-3の意見にあるように負担が大きく誰も提案をしなくなっている。その辺りは、今議論のあったように支援の仕方などをもう少し明確化することで対応していくしかないと思う。もう一つの大きな課題は、知床の地域全体としての大きな利用の方針なりそれを担保する制度が欠如している状態で、無秩序に提案がなされ、その提案がばらばらに進んでいくことだ。特に知床半島先端部地区の利用の方針として、知床半島先端部地区利用適正化基本計画があったが、いつの間にか廃止され、何でも提案してよいという提案制度に置き換わったため混乱が生じた。そういった課題があったため、しっかりとした大きな利用の方針を骨

格として定めるべきという議論を行い、地域が主体的に2年間もかけて作成したのが「利用のゾーニングとイメージ案」だ。提案制度は、将来目標をしっかりと議論し、明確にした上で運用しなければ、個別の提案が全体の目標から逸脱することが懸念される。ゾーンごとの利用や保全のあり方を明確に法的に担保することが一番よい。

敷田：意見感謝する。他に意見はあるか。

間野：資料4-3の課題を見た時に、エコツーリズム戦略の見直しにあたっては、インフラ整備も合わせて議論の俎上に上にあげる取組みをしなければ、次期エコツーリズム戦略の運用開始まで無為に時間だけが過ぎてしまうのではないか。提案制度にインフラ整備や予算、制度の裏付けがなかったが故に提案しても実現しない、あるいは棚ざらしのような状態になってしまい、さまざまな希望やアイデアを持って取り組もうとした人たちの気持ちがスポイルされてしまうという、良くない結果が一面としてあったと考えている。法令や予算上の制約からできない部分も理解するが、しっかりとインフラとして整備し、利用できるような社会環境を作らなければならない。本州で成功したからと言って、交通面の問題もあるため北海道で成功するとは限らない。しかし交通面の問題たるインフラ整備の問題は恐らくエコツーリズムだけの問題ではなく、地域社会全体が活性化する非常に大きな鍵になっていると思う。先ほどの羅臼町における公共交通機関が脆弱になり、問題が生じているという話があったが、それはエコツーリズムだけの問題ではなく、住民の生活に直結している問題でもある。行政も含め地域関係者が広く普遍的な問題として考えていく必要がある。エコツーリズム検討会議の場で問題意識を関係者が共有した以上は、地域社会のためにしっかりと主張し、足並みを揃えたビジョンを目指すべきだ。

敷田：具体的な提案には支援も必要であるという意見だ。この点について、事務局としては継続審議ということによろしいか。

岡野：多くの意見をいただき感謝する。エコツーリズム戦略を来年度以降見直していく中で、知床の利用がどうあるべきかという大きなビジョン、考え方が必要である。見直し案の中の「良質な自然体験の提供に必要な要素」という項目では、どのようなメッセージを伝えたいか、経験をしてもらいたいのかを皆で議論し、目指すところを明らかにしつつ、地域で振り分けた利用のゾーニングとイメージが作成できれば、実現していくべき大きな方向性がまとまると思う。それをどのように実現していくかは、提案制度と関係機関とのサポートとが必要と考えている。この議論は、エコツーリズム検討会議で来年度以降も続けたい。地元関係機関の団体の構成員の方々

にも意見を頂戴したい。今後はワークショップ形式で呼びかけさせていただく場合もあるが、エコツーリズム検討会議に参加している各構成団体においては、自身の団体・組織の中でも共有と議論を進めて頂き、一緒に取組みたい。よろしく願います。

敷田：基本的に管理の大方針は皆さんがご覧になっている遺産管理計画で定められている。一方、エコツーリズム戦略は遺産管理計画の個別計画に相当し、それに従って観光全体のあり方を決め、実行してゆく内容と考えていただきたい。提案制度もその枠内で運用するものであり、何でも提案ができるわけではない。エコツーリズム戦略においては、3つの基本原則と8つの視点が定められており、記載内容を確認すれば、何でも提案できるわけではないと分かるはずだ。こうした方針もエコツーリズム戦略の見直しを通じて明確にしなければならないと考えている。今後も継続的にご協力をお願いしたい。皆さんのひとつひとつの前向きな提案が積み重なることでしか改善しない。それぞれの考えの違う人が参加して進んでいるため、自分と違う考え方の人がいるという前提で協働していただきたい。

5. その他

(1) 知床国立公園 60 周年・世界遺産 20 周年記念事業の概要

資料5-1 知床国立公園 60 周年・世界遺産 20 周年記念事業について…環境省・井村が説明

敷田：説明感謝する。今年から来年にかけていくつかの企画があるが、積極的に参加や意見をお願いしたい。私からの質問だが、GOLDWIN と SNOWPEAK との連携の担当窓口はどこか。

岡野：GOLDWIN は斜里町と SNOWPEAK は羅臼町とそれぞれ包括連携協定を締結しており、両町が窓口になっている。知床国立公園 60 周年と世界遺産 20 周年記念事業の取り組みについては、環境省としては本省の国立公園利用推進室が担当しているが、現在は私が一括して連携を取らせて進めていただいている。

敷田：承知した。私からの提案であるが、エコツーリズム検討会議の場に GOLDWIN と SNOWPEAK に参加を依頼するのはどうか。私たちが地道に進めている検討の場に参加いただければ、本当の連携が可能となる。誘致していただけないか。

岡野：現場の管理等にも積極的に関与いただく可能性もあるため、相談したい。

敷田：ブランド化に向けては、外部の意見も重要であり、会議の議論なども実態を見て頂

くのがよい。連携の一部としてエコツーリズム検討会議に参加してほしい旨をリクエストしていただきたい。

岡野：承知した。

敷田：斜里町と羅臼町はよろしいか。

湊：羅臼町は SNOWPEAK と包括連携協定を結んでいる。知床国立公園 60 周年事業は、斜里町と包括連携協定を結んでいる GOLDWIN、環境省、関係機関と協働で行う予定だ。しかし検討会議は協議ではなく報告の場であると認識している。そのため検討会議の場に SNOWPEAK と GOLDWIN は参加する必要はないと思う。

河井：結論として羅臼町と同様で、GOLDWIN は地域で合意・決定したことに対し、後押しや援助をする立場だ。地域の意思を尊重する立ち位置を望んでいるものと理解しており、エコツーリズム検討会議といった地域協議の場に当事者として参加する意向はないものと理解している。

敷田：説明感謝する。両町の意向を尊重するが、当事者になってほしいという意図ではなく、エコツーリズム検討会議で行われている真摯な議論を知っていただいたほうが、よりよい連携ができるのではないかと、という提案である。

河井：検討会議の場でどのような議論をし、地域の合意を組み立てているかは先方にも随時共有している。

敷田：河井氏の発言の通りであれば、問題はないと思われる。斜里町、羅臼町の意向を尊重したい。関連して他に意見はあるか。

長谷川：現在、周年記念事業のロゴマークを作成しているとのことだが、ヒグマー色のロゴマークはやめていただきたい。知床は陸海空が揃ってこそ世界自然遺産の特徴が際立つ。シレットコスミレなども避け、インパクトのあるロゴマークにいただきたい。

敷田：意見に感謝する。ロゴマークを工夫していただきたいという意見だ。

(2) 長期モニタリング計画に基づく調査結果の報告について

・資料5-2 2023 年度 知床国立公園利用状況調査の結果(暫定版)

・資料5-3 長期モニタリング計画に基づく聞き取り調査の結果について…知床財団・秋葉が説明

敷田：説明感謝する。内容について確認したいことがあれば意見を願います。現在の説明は概要であり、内容は非常にボリュームがある資料が付いている貴重なデータであり、ぜひ活用していただきたい。知床白書には過去のデータもあり、今回の利用状況調査の結果についても10年分のデータが掲載されている。特に意見がなければ閉会前一つお知らせがある。今回、科学委員会にあわせ各WGの設置要綱が改定され、委員の70歳の年齢制限が定められた。そのため中川委員が今回の会議を持って退任することとなる。2004年の科学委員会設置の以前から知床国立公園の保全や管理に携わってきた。中川委員からメッセージをいただきたい。

中川：適正利用の議論に本格的に係ったのは、「利用の心得」の策定が最初だったと記憶している。エコツーリズムWGやエコツーリズム検討会議は、さまざまな立場や経験、知識を持っている方々が一堂に会し、利用の問題や課題について議論する初めての場であり、素晴らしいと思った。これからも非常に活発で有意義な議論をお願いしたい。事務局や座長、構成員の皆さまも含め協働の場を継続していただきたい。利用の課題は、正解がない場合も多いが、協働を進めることで正解に近い結果を出すことができるのではないかと思う。これからも継続して知床の保全と利用の良い形を皆さまで作っていただければと思う。

敷田：中川委員に感謝する。中川委員がこれまで培った経験や発言は引き継がれるはずだ。私たちが引き継ぐ側として肝に銘じ、尽力する所存だ。以上で2023年度第2回適正利用・エコツーリズム検討会議を終了する。議論に積極的に参加していただき感謝する。皆さまの意見は次の誰かの発言を促すためにある。正解はひとつではないため、多様な考えの中で正解をひとつでも見つけられればよい。苦勞することも多いが、議論することの積み重ねが次世代に引き継がれていくため、引き続き協力をお願いしたい。

井村：敷田座長、長時間にわたる進行に感謝する。そして、中川委員もこれまでの貴重なご助言に感謝する。以上で2023年度第2回適正利用・エコツーリズム検討会議を終了する。

(閉会)